

『唐高僧伝』にみられる南岳慧思門下の禅観実修の動向

武 藤 明 範

一 はじめに

『止観輔行伝弘決』には、天台の相承説として、明・最・崇・就・監・慧・文・思・顓から成る九師の名前と、九師が実践した禅法として、七方便・融心・本心・寂心・了心・踏心・覚心・随自意・次第観・不定観・円頓観を挙げている。⁽¹⁾これら九師のうち、第七師以下は、慧文（一五五〇）と慧思（五一五—五七七）と智顓（五三八—五九七）の三師であることは確かであるが、三師以外の六師が誰を指すのかは不明である。

『梁高僧伝』『唐高僧伝』は、訳経など全十篇から成り、後漢から初唐にかけて活躍した僧の行実を記している。中国仏教における禅観実修の動向を論じたものに、既に先学の優れた研究がある。⁽²⁾しかし、これらの研究は、『梁高僧伝』『唐高僧伝』の全篇にわたって禅観実修者の動向を考察したものはなく、『唐高僧伝』習禅篇に収録されている人や、一部の人

を取り上げて、禅観実修の動向について論究されたものである。

私は、インド伝来の実践法門を『大智度論』などを基にして天台の実践法門として体系化した、智顓の禅観・止観思想を研究する場合、少なくとも、先の両書全篇にみられる禅観実修の動向について検討する必要があると考え研究を続けている。⁽³⁾このような問題意識に立つて、私は『智者大師別伝』『国清百録』を傍証資料として参照しながら、『唐高僧伝』の中から禅観や懺法などを通じて、慧思や智顓などと交流のあった人や、天台山行遊経験の禅観実修者を検索した結果、在俗を通じて四十一名を確認することができた。今回の論攷では、全部の人を取り上げるのは紙幅の関係から難しいので、慧思門下の禅観実修の動向に限定して論究する。具体的には、慧思門下ではどのような修行法が実践されていたのか、また慧思門下の禅観実修者のグループがどの地域に存在したのかなどを、文献学的方法によって考察を試みることにしたい。

二 『唐高僧伝』にみられる慧思門下の 禅観実修者の動向について

『摩訶止観』の序文によれば、智顗は慧思から漸次・不定・円頓から成る三種止観を伝授されたという。⁽⁴⁾しかし、慧思が説いた三種止観が具体的にどのような内容であったかは、現存する慧思の『随意三昧』などの著述から推測することは困難である。但し、『唐高僧伝』などが伝えるように、智顗が慧思のもとで法華三昧の前方便を發得し、慧思が智顗の師として、天台の禅観・止観思想成立に重大な影響を及ぼした存在であることには変わりはない。また同時に慧思は、道宣(五九六―六六七)が「義解偏重にあつた当時の仏教界に対して、慧思は定慧双開を主張して大いに禅風を鼓吹し、遂には南北の禅宗にして慧思の薫陶を承けない者はない」⁽⁵⁾と評価するほど、中国仏教史における禅観実修の動向を考える上では、等閑視することのできない人である。

『唐高僧伝』を俯瞰すると、慧思門下の禅観実修者として、慧璿(生没年未詳)・惠成(生没年未詳)・慧命(五三一―五六八)・智顗・慧耀(五二五―六〇三)・慧超(五四六―六三二)の六人を確認できる。しかし、惠成伝や慧思伝の中には、「慧思門下には当時禅門の精通者数十人あり、みな先達の人である」⁽⁶⁾や「慧思は四十余僧を率いて南岳に赴く」⁽⁷⁾とあり、当時

の中国仏教界は、優れた師がいればその師のもとで参学する「多師多学」の傾向にあつたように、慧思のもとには『唐高僧伝』に記録された人以外にも多くの僧徒が雲集したと推測できる。事実、『国清百録』などには慧思門下で「説法第一」と称された智顗に対して、「禪定第二」と称された信照(生没年未詳)がいた。⁽⁸⁾『国清百録』によれば、信照は方等懺法の実践者であり慧思没後も南岳で徒衆を率い、後に慧日道場に住人であつたが、⁽⁹⁾『唐高僧伝』には記録がなく、行実については不明である。従つて本論攷では、慧璿・惠成・慧命・智顗・慧耀・慧超の六人と慧思を中心に、慧思門下の禅観実修について考察する。尚、その内訳としては、立伝なしが一名・習禅篇が四名・感通篇が一名・説誦篇が一名である。

このうち禅観関係の典籍を著わした人として、慧思は『大智度論』などに基づいて『四十二字門』『次第禅要』などを著わし、智顗は『次第禅門』などを著わした。このような典籍を著わした人は、禅観や懺法などに精通しており、禅の指導や仏道修行の場として、道場などを設営している。例えば、慧思は「臨終に及び山頂より半坐道場に下り、連日説法する」⁽¹⁰⁾とあり、また智顗は「瓦官寺で禅法を弘め、白馬寺の警紹などが学んだ」⁽¹¹⁾とある。これらの記録から、禅観実修者が専門的に修行するため寺院を中心に修行生活が行われていたことが分かる。

『唐高僧伝』にみられる南岳慧思門下の禅観実修の動向(武藤)

次に、彼らが実践した修行法や修行の内容に注目すれば、修禅や懺法などの実践が多いことが分かる。例えば、慧耀は「巴」丘の禅律まれなるを聞き、道懿と共に西上し導因寺に十四年間留錫す。慧耀は同寺から他出せず、ただ禅静を味わう⁽¹²⁾とあり、慧思門下では常に坐禅が実践されていたことが分かる。また慧超伝や惠成伝には、「慧思は一乗を悟り、普く三観を明かす。慧超は智顗や慧命と共に、慧思のもとで積年修行す⁽¹³⁾」とあり、「匡山の寺で惠成は智顗から慧思の話を聞き、定業を学ぼうと決意す⁽¹⁴⁾」とあり、更に慧布伝には「禅宗の慧可(四八七―五九三)に参じた慧布(五一八―五八七)は、慧思にも参じて日夜、大義を論議す⁽¹⁵⁾」とあり、当時、禅観実修者として有名であった慧思のもとには、慧超や智顗を始め多くの僧徒が参集していた。

それでは、慧思門下ではどのような禅観が実践されていたかを検討すれば、慧超は「疾病し西面に正坐し、第一義空清淨智観⁽¹⁶⁾といって入滅した」とある。第一義空清淨智観は、『禅要経』の中で不浄観に属する白骨観を説く中に出てくるものである⁽¹⁷⁾。慧超が臨終の際に、第一義空清淨智観といったのは、自らの死の超克があったかは不明であるが、少なくとも慧超は、『禅要経』に依って修禅していたと考えられる。また惠成は、「慧思から憑疏文依他生解という義解法を否定され、章抄や筆硯を破棄。十五年間、開眼して修禅。慧思から方等・

観音・法華・般舟道場を導かれる。歴試鎖障、三年実践し、魔業や禅鬼を散絶し、遂に衆生語言三昧を解す⁽¹⁸⁾」とあるように、惠成は、師の慧思から方等・観音などを導かれ、遂に衆生語言三昧を得ている。衆生語言三昧は、『法華経』などに説くように、衆生の言葉を理解する三昧である⁽¹⁹⁾。しかし、慧思の『諸法無諍三昧法門』の中にもこの三昧を説いていることから、慧思は方等などの他にも、『諸法無諍三昧法門』に基づいて惠成を指導したと考えられる。

また今述べたことと関連するが、慧思が「臨終に際して弟子に、常に法華・般若・念仏三昧・方等懺悔の実践を強調⁽²⁰⁾」した影響や、あるいは当時の中国仏教界では懺法を実践することは、出家者の間で一般的な慣習になっており、また当時の仏教者達の間では、禅定に伴う一種の修行、つまり「禅定」とか「三昧」とか「懺法」が同じ内容をもつようになっていたという指摘もあるように、慧思門下でも懺法の実践が多い。

いまは、彼らが実践した懺法の名称とその実践者と人数を記せば、法華懺法を惠成と慧思の二人が、方等懺法を惠成と慧命と慧思の三人が、観音懺法を惠成と智顗の二人が、普賢懺法を慧命の一人が、普賢道場と四安樂行を智顗の一人が実践している⁽²³⁾。中でも、『大方等陀羅尼経』に基づいて行う、方等懺法の実践者は四人と最も多い。『唐高僧伝』には智顗の方等懺法の記録はないが、『智者大師別伝』によれば、智顗

は大賢山で法華三部經を二十日間誦誦し、その深義を極めた後に、二十一日間にわたり方等懺法を実践した結果、勝相が現前したとある。⁽²⁴⁾先に述べたように、信照も方等懺法の実践者である。『国清百録』によれば、ある時信照は大衆の塩を盗んで齋時に服用したが、少量であったので問題としなかった。後日、信照が同懺法を実践すると直ぐにその時の様子が起こり、計ってみると三年間に盗んだ量は数十斛になっていた。そこで自らの衣資を売って、塩を買い大衆に償ったという。⁽²⁵⁾前述したように、当時は懺法を実践することは出家者の慣習になっており、また智顗が「諸の方等師」と呼ぶように方等懺法を実践する一群の実践者がいたほど中国各地で実修されていたという指摘もあるので、⁽²⁶⁾慧思門下でも重要な懺悔法の一つとして重視されていたと考えられる。

また慧思が『法華經安樂行義』『諸法無誑三昧法門』の中で、『法華經』とは大乘頓覺、無師自悟、疾やかに仏道を成ず⁽²⁷⁾』といい、「妙法華會は、一乗極頓にして諸仏の智慧を説く⁽²⁸⁾』と述べたように、『法華經』を究竟至上の經典であると規定した影響を受けてか、慧超のように五十余年間に『法華經』を一万回余り誦經した人もいた。⁽²⁹⁾

これらの修行法によって、禪觀実修者が得た三昧の境地を検討すれば、智顗は法華三昧の前方便を發得し、惠成は衆生語言三昧を体得している。惠成伝には、「慧思は智顗と惠成

の証果を比較して、前者は三昧を發こしてから總持を証し、後者は總持を發こしてから三昧を得たが、慧思の目から見れば両者の証果は同じであると評した⁽³⁰⁾』とあるように、慧思は弟子の証果を判定し「印可」を与えている。『維摩經』に説くように、師が弟子に印可を与えるのは仏教の伝統であり、恐らく慧思もそれを踏襲したと考えられる。また印可ではないが、慧思は慧耀や慧超に対して、前者を「実相觀において玄趣あり⁽³¹⁾」と評価し、後者を「神府にして得忍の人⁽³²⁾」と称賛している。これらの記録から、慧思は弟子達が修行を続けても、邪心に迷うことのないよう「記莖」を与えたと考えられる。慧思門下にはその他にも、「慧思の神足⁽³³⁾」といわれた慧耀や、禪定第一の信照などがおり、慧思の禪風は、弟子達を通じて活況を呈していた。

いまは慧思門下の禪觀実修者の行遊先を地域ごとに分類すれば、河南省大蘇山や湖南省南岳や江西省廬山に集中していることが分かる。これは今回考察した範圍が、大蘇山や南岳を中心に活躍した慧思から禪觀や懺法などを通じて、交流のあった人を考察したためであると考えられる。

三 おわりに

私は、今回の研究を通じて禪觀実修者の動向の底流には、修行を通じて、仏教を自家菜籠中のものにしようとする姿勢

『唐高僧伝』にみられる南岳慧思門下の禅観実修の動向(武藤)

を感じた。今回論じなかった『唐高僧伝』にみられる智顗及び灌頂門下などの禅観実修については、『愛知学院大学大学院文学研究科・文研会紀要』第十七号に掲載予定である。今後は、天台の禅観・止観思想の終極として智顗が体系化した『摩訶止観』の十境十乘観法の成立に、禅観実修者が実践した禅観や懺法などどのように関わったのかなどを考察していく予定である。

- 1 『止観輔行伝弘決』巻第一之一(T 46・149 a-b)
- 2 木内堯典稿『統高僧伝』習禅篇と初期天台(『天台学报』第三十九号、一九九七年十月)など多数
- 3 拙稿『唐高僧伝』にみられる禅観実修の動向(二)(『曹洞宗研究員研究紀要』第三十五号、二〇〇五年三月)など
- 4 『摩訶止観』巻第一上(T 46・1 c)
- 5 『唐高僧伝』巻第二七(T 50・564 a)
- 6 『唐高僧伝』巻第二六(T 50・557 a)
- 7 『唐高僧伝』巻第二七(T 50・563 b)
- 8 『智者大師別伝』(T 50・195 c)『国清百録』巻第一・第二(T 46・799 a・807 c・808 a)
- 9 『国清百録』巻第一・巻第二(T 46・799 a・801 b・806 a)
- 10 『唐高僧伝』巻第二七(T 50・563 c)
- 11 『唐高僧伝』巻第二七(T 50・564 c)
- 12 『唐高僧伝』巻第二五(T 50・662 a)
- 13 『唐高僧伝』巻第二八(T 50・687 b)
- 14 『唐高僧伝』巻第一六(T 50・557 a)

- 15 『唐高僧伝』巻第七(T 50・480 c)
 - 16 『唐高僧伝』巻第二八(T 50・687 b-c)
 - 17 『禅要経』(T 15・238 a)
 - 18 『唐高僧伝』巻第一六(T 50・557 b)
 - 19 『法華経』(T 9・55 a)『大智度論』巻第五〇・巻第九七(T 25・418 c・735 a・737 a)
 - 20 『諸法無諍三昧法門』(T 46・631 c)
 - 21 『唐高僧伝』巻第一七(T 50・563 c)
 - 22 福島光哉稿『業障と懺悔』(『真宗教学研究』第二二号、二〇〇一年一月)
 - 23 『唐高僧伝』の各伝を参照
 - 24 『智者大師別伝』(T 50・191 c)
 - 25 『国清百録』巻第一(T 46・799 a)
 - 26 『摩訶止観』巻第八之下(T 46・112 c)大野栄人著『天台止観成立史の研究』(八三一―一頁、法蔵館、一九九四年七月)
 - 27 『法華経安樂行義』(T 46・697 c)
 - 28 『諸法無諍三昧法門』(T 46・635 b)
 - 29 『唐高僧伝』巻第二八(T 50・687 b)
 - 30 『唐高僧伝』巻第一六(T 50・557 b)
 - 31 『維摩経』(T 14・539 c)
 - 32 『唐高僧伝』巻第二五(T 50・662 a)
 - 33 『唐高僧伝』巻第三一(T 50・687 b)
 - 34 『唐高僧伝』巻第一六(T 50・557 b)
- (キーワード) 『唐高僧伝』、慧思、慧思門下、禅観、懺法
(愛知学院大学大学院)

28. Trends of Practice among Disciples of Nanyue Huisi According to the *Xu Gaoseng zhuan*

Akinori MUTŌ

I have researched disciples who were guided by Nanyue Huisi (南岳慧思), Tiantai Zhiyi (天台智顗) and various teachers of Tiantai, and those who practised Chan meditation in Mt. Tiantai (天台山) referring to the *Tiantai Zhizhe Daishi biezhuàn* 『智者大師別傳』 and the *Guoqing bailu* 『國清百錄』 as supporting materials.

As a result, it was possible to confirm 41 disciples including not only priests but also laymen by means of searching “changan 禪觀 (sitting in meditation)”, and “chanfa 懺法 (method of repentance)” recorded in the *Xu Gaoseng zhuan* (『唐高僧傳』).

In this thesis, I have focused on such disciples as Huicui (慧璀), Huicheng (惠成), Huiming (慧命), Zhiyi (智顗), Huiyao (慧耀), Huichao (慧超) and Huisi (慧思), and tried to examine the trends in which Buddhist ascetics led and trained by Nanyue Huisi practised Chan meditation, based on the *Xu gaoseng zhuan*.

In a concrete form, I have tried to examine what kinds of training methods were practised by disciples belonging to the Huisi group, and in which regions in China they existed, in accordance with philological methods.

29. “Enlightenment” in the *Congrong lu* in Comparison with the *Biyān lu*

Shūji NISHIOKA

Enlightenment is a fundamental issue in Buddhism, and it is the central concern of Zen as well. This study examines the understanding of enlightenment in the *Congrong lu* in comparison with the *Biyān lu*, with some observations made. In regard to the stages of training and the fruits thereof, the *Congrong lu* does not recognize any significant differences, but the *Biyān lu* accepts a tentative difference. Therefore, it is important to realize the essence of humanity (the “original face”) in the *Congrong lu*, and a major fea-